

空想された故郷への埋葬

エアハルト・ブッシュベック 『ゲオルク・トラークル、
鎮魂歌』 について

日 名 淳 裕

1. はじめに

ゲオルク・トラークル (Georg Trakl 1887-1914) の名は今日ドイツ文学史においてその支援者ルートヴィヒ・フィッカー (Ludwig Ficker 1880-1967) と分かちがたく結びついている。ただし、実際にトラークルがフィッカーと交流した期間は、1912年から1914年にかけてであり、二年に満たない。フィッカーがトラークルの文学史への位置付けに貢献しえたのは詩人の晩年および死後に限られてであり、トラークルの第一詩集『詩集 (Gedichte)』¹ 刊行に至るまで、つまりトラークルが文学史に初めてその名を現す過程においては、むしろ同郷の友人エアハルト・ブッシュベック (Erhard Buschbeck 1889-1960) の働きが大きい。この事実はトラークルの伝記研究においてはよく知られている。しかし、その詳細および文学史的意義についてはいまだ十分に議論されてきたとは言えない。

トラークル研究史におけるブッシュベックの評価が、フィッカーのそれと比較して軽視されてきた理由の一つは、トラークルの晩年における二人の友情の決裂に求められるかもしれない。1912年に始まったとされるブッシュベックとトラークルの妹マルガレーテ・ランゲン (Margarethe Langen 1892-1917) との恋愛がその契機となった。二人の関係は1913年秋にトラークルの知るところとなり、この後二人の間の交友関係はその痕跡を完全に消す。² 1910年にザルツブルクの父親が死に、ウィーンで音楽を学んでいたマルガレーテがベルリンに転居して以降、ブッシュ

ベックが活動の拠点としたザルツブルク、ウィーン二つの都市とトラークルの間の繋がりが希薄になったことも影響するだろう。トラークルは1912年にインスブルックの駐屯地に薬剤士官補として配属されてより創作活動の舞台をインスブルックに移す。詩人の往復書簡集を眺めると、ブッシュベックとの決別を境にトラークルの手紙の大半がフィッカーに宛てられたものとなる。こうした状況下に第一次世界大戦が勃発し、トラークルは1914年8月に東方戦線に出発、同年秋にクラカウの野戦病院で自殺した。短い生涯の晩年に起こった目まぐるしい生活の変化と異郷における突然の死が文学史におけるトラークル像に影響を与えたことは間違いない。フィッカーが編集した雑誌『ブレンナー (Der Brenner)』³とそこでの議論が中心となって、トラークル晩年の作品とイメージから、トラークルが再解釈されていった。

ブッシュベックは1910年以降、様々な雑誌にトラークルの詩を掲載した。⁴ 1912年に「文学と音楽のための学生連盟 (Akademischer Verband für Literatur und Musik)」の会長に就任するとウィーンを中心に多様な芸術活動をプロデュースした。⁵ 1918年には文芸評論家ヘルマン・バール (Hermann Bahr 1863-1934) によってブルク劇場のドラマトゥルグに任命される。仕事の傍ら自らも執筆活動を展開したが⁶、亡き親友トラークルの作品の保護と周知にも尽力した。国立劇場の重要職という社会的地位を活かして、第一次世界大戦による社会の経済的困窮期に、『ゲオルク・トラークル、鎮魂歌 (Georg Trakl, Ein Requiem)』[以下、本稿では『鎮魂歌』と記す。]⁷を自費出版したことはその一つである。この試みは、オーストリアがナチス・ドイツに併合されていた1939年にザルツブルク版トラークル全集第二巻『金の杯から (Aus goldenem Kelch)』⁸を編集したこと、第二次世界大戦後にウィーンで複数の雑誌に執筆し、トラークルを忘却から守る試みへと繋がってゆく。この働きなくして戦後のトラークル再評価およびトラークルの戦後抒情詩への接続はあり得なかった。⁹

詩人がそこで生まれ、青年期前半まで生活したザルツブルクと、死の

直前に精神的故郷として発見されたインスブルックは、従来のトラークル研究史においてしばしば二つの異なった視座として認識されてきた。しかし、双方を代表することで反発するようにも見受けられるブッシュベックとフィッカーの間には、トラークルの死後から密とは言えずとも途切れることのない交流が続いた。¹⁰ フィッカーはザルツブルク版全集の編者ヴォルフガング・シュネーディッツ (Wolfgang Schneditz 1910-1964) を仮借なく批判したが、その批判はブッシュベックには向けられなかった。『ブレンナー年鑑 1915』に掲載されたトラークルの「遺影」や書簡をブッシュベックはフィッカーの求めに応じてフィッカーに提供した。二人の交流があってこそ、トラークルという寡作で夭折の詩人が文学史にその名を残すことができたのだ。それゆえザルツブルクとウィーンを中心としてトラークルがその死後にどのように受容されたのかを問い直すことは、インスブルックとフィッカーを中心として完成されていった周知のトラークル受容に対する補完的な視点を提供するものとなる。本稿はこのような考えに基づき、以下にブッシュベックが戦間期に出版した『ゲオルク・トラークル、鎮魂歌』を精読し、このあまり知られていない作品がトラークル研究史においてどのような意義を持ちうるのか検討する。

2. エアハルト・ブッシュベック『ゲオルク・トラークル、鎮魂歌』

トラークルとブッシュベックは幼年期からの友人で、後にウィーンで第一詩集刊行の機会を探っていたトラークルのテキストを校正し、様々な出版社と交渉を行うなど詩人の創作の場に深く関わっていた。¹¹ この関係は 1913 年にローベルト・ミュラー (Robert Müller 1887-1924) を介して、トラークルがフィッカーと知り合い、『ブレンナー』に作品発表の場を保証されて以降、上述のマルガレーテをめぐるいざこざもあって急速に冷え込んでいった。1914 年にトラークルは出征先で自殺し、1917 年にマルガレーテもベルリンで自殺した。ブッシュベックの『鎮魂歌』

はこのような二重の背景をもつものだ。書籍の見返しには「500部がミュンヘンの印刷所M・ミュラーで印刷された」と記載されている。¹² トラークルの生没年が記された頁を置いて、「一人の感受性豊かな少年が古い街で育った (Ein empfindsamer Knabe wächst in der alten Stadt auf.)」という言葉とともに本文が始まる。

大理石でできた宮殿、大きな広場、教会の奇跡のうちにこの街が彼を前にしてあった。/ 城塞を冠のようにこの街は戴いていた。/ 別荘がこの街の頭をめぐり飾っていた。ミサと祝祭、戦いと法令の間で領主司教らが彼らの街を築いた。¹³

散文で書かれているが、頻繁に改行が施されたまともまりがアステリスクによって数珠様に繋がった体裁をとっている。修辞に重点を置いた文体であり、トラークルが書いた一連の散文詩のスタイルを彷彿とさせもする¹⁴。また冒頭の「少年 (Knabe)」という語はトラークルの詩「少年エーリスに寄す (An den Knaben Elis)」¹⁵を思い起させる。部分的にトラークルの語法を用いて、この作品はトラークルが生まれ育った街ザルツブルクの描写をする。前半部分では新市街のミラベル城から旧市街のモーツァルト広場、ザルツブルク大聖堂、ザルツブルク城へと視点が街の内奥へと導かれることでこの古都の歴史が語られる。

宮殿は今日人気がなく、広場はよそ者によって驚嘆され、教会の中には老婆たちが座っている。ただ泉だけが街の中で昔日のように音をたてている、あたかもまだ命の泉であるかのように。冬にはそれらもまた止められ、小板を打ち付けられる。—世界は釘づけにされ、この街は死ぬ。¹⁶

街の名になっているようにかつて塩の交易で栄えた大司教の統治するザルツブルク、この街に「少年」が生を享けた時にはもはや往年の活気は

なく、「街は死んでいる」。随所に現在ではなく過去が留まっているこの街がトラークルの詩人としての最初の感性を培ったという表現は、ザルツブルクがオーストリア＝ハンガリー二重帝国の小宇宙として、世紀転換期にかけて広く共有された終末観に通じるものだ。こうした意識はトラークル自身によって初期の詩に多く表現を与えられた。確実に滅びへと向かっている予感に包まれてはいても不思議な庇護感を与える「美しい街」¹⁷。

一日は現実的でなく、過ぎ去ってゆく。/ あらゆる争いは遠くにある。
外側のあそこに、他のどこかにそれはあるべく定められている。¹⁸

ブッシュベックの『鎮魂歌』の基調となっているのは、ザルツブルクの地誌がトラークルの深層心理を最後まで規定したという見解である。街に残る多くの遺物をとおして過去に侵食されてさえているヘテロトピア、これがトラークルにおける「歴史性の欠如」¹⁹を説明する。

敵として彼は心の底で至るところに動き（Bewegung）を見た。/ そのようにして彼はあらゆる動きを憎むことを学んだ。/ 動きが前面にやってくると、繰り返し彼から何かを奪ったのだ。²⁰

彼は引かれつつこちらへと速足で駆けてくる馬に身を投げようとした。鉄道の線路の上に踏み出そうとした、ただ留めるために、止めるためにである。動きを彼は否定しようとした。最も確固たる手（Die festeste Hand）のみがそこからこの強い少年を取り去った。²¹

ここには伝えられるトラークルの自殺衝動を読み取るべきだろうか。馬に身を投げるといふのは、作品中にも名指されるドストエフスキーの『罪と罰』の一節を思い起させる。²²『鎮魂歌』にはこのほかにも湖面に張った氷を破って溺れた犬の逸話があるが²³、これらが実際にあった出

来事なのかは確かめようがない。こうした逸話が、文学作品と現実の境界を越えようとするトラークルの傾向を表現したと考えるならば、素朴な時間概念からの逸脱を企図する詩人の姿と対応していると言えるかもしれない。上の引用にある、彼を自殺から救った「最も確固たる手」が、トラークルにおける詩作の暗喩であることは続く文章から理解される。

彼はイメージを形作ることを始めた、形象は色彩からはがれた。/ 彼はイメージを、彼の周囲を映す自らの胸の中に探すのではなく、イメージのみを所有するために、可能な限り遠い異質なものに求めた。/ 聖書と砂漠の砂から彼の最初の詩が立ち上った。/ 彼は彼のイメージの世界を愛し、その外にあるものを軽蔑した。²⁴

ブッシュベックはトラークルの詩作の原点をこのように説明した。歴史的な時間から離れた純粹イメージの造形が、トラークルの周囲にある現実と、始まりにおいて対立するものであったという。トラークルの作品に現れる聖書のモチーフについてはこれまでの研究史で繰り返し指摘されてきた。「砂漠の砂 (Wüstensand)」もその一部かもしれないが、ここにはトラークルが愛読したと言われるアルトゥール・ランボー (Arthur Rimbaud 1854-1891) の影響が示唆されていると取ることも可能だ。²⁴ トラークル研究史においては、キリスト教的世界と異教的世界双方に導かれた密閉的詩空間の詩人という理解を支えるものとして、フリードリヒ・ヘルダーリン (Friedrich Hölderlin 1770-1843) とランボーが二つの参照項として確立されていった。²⁶ とくに『鎮魂歌』におけるランボーを暗示するものとして、トラークルがこの件以降、「見る者 (der Schauende)」という呼称で登場することがある。トラークルを指す言葉の変遷を見ると、はじめは「少年 (Knabe)」であり、次第に「彼 (Er)」へとより客体化される。それが「詩作」の指示とともに、「見る者」へと移行する。さらに、詩人＝「見る者」という定義は、のちにフィッカーらによってキリスト教的予見者としての詩人へと語り直されてゆ

く。つまり、トラークルにおける異教的な要素がそれを指示する語によってキリスト教的な要素に回収されていった。

この箇所を境に、『鎮魂歌』はトラークルの伝記と一致する形で語られてゆく。

最初の試みは劇場へ行った、彼は注目を感じ取り、さらに先へと行った。²⁷

これはトラークルが、グスタフ・シュトライヒャー（Gustav Streicher 1873-1915）の支援を受けて自作の戯曲をザルツブルク州立劇場で上演したことを指している。時系列が多少前後している箇所も見られるが、ウィーン大学で薬学を学ぶことになった時期は以下のように始まる。

彼が決してその元を離れなかったイメージの街から彼は大都市に行く定めにあった。/それは遠方からよそよそしく冷たく彼をじっと見つめていた。/彼は大司教の庭「ミラベル」に腰を下ろし、一つの冷たい手が見る者の（dem Schauenden）の胸に手を伸ばすのを、彼からその美しい生を奪い、彼を丸裸で孤立させて、敵意に満ちた風の下よその土地へとにやにや笑いながら立たせることを思った。²⁸

ウィーンへの嫌悪をトラークルは手紙の中で繰り返し述べた。²⁹しかし、プッシュベックの励ましによって詩人としての活動を続けることができた。また、少し遅れて兄を追うようにマルガレーテがウィーンに出てきたこともあり、必ずしも悪感情だけで語られる場所であったとはいえない。ここには理想化された故郷ザルツブルクとの対比としてのウィーンが描かれていると考えるべきだ。

ただ夜になるとときおり、彼がワインを飲んで安心感を得た時、彼は旧市街をさまよい、悪しき瞳で大きなカフェをのぞき込んだ。彼は通

りに向って嫌悪を叫びだし、怒って寝静まる大都市を音立てて歩いた一外へと、早朝になるところへと。/ 一人の穏やかで敬虔な者がシェーンブルンの木々の上に太陽が上るのを見た。³⁰

ザルツブルクにいるときトラークルは同じように郊外のヘルブルン宮殿まで散歩し、夜明けまでそこで過ごしたという。したがってブッシュベックはウィーンとザルツブルクの出来事を混同しているのではないか。また、ワインと散歩というのはトラークルの詩によく現れる書割の一つだと言える。³¹ つづく箇所にはトラークルの精神疾患を窺わせるものがある。

こうして彼は完全に自らの内に安らいだ。あたり人間世界に対して防備を固めた。その間に堀を設え、距離を保つことを望んだ。/ 肉体的にも彼は自らを閉じた。彼の知覚は彼の肉体の不可触の感情にまで高まった。³²

ザルツブルクで滅びの感覚の内にも庇護を見出していたのとは異なり、ウィーンではトラークルの身体が世界に対して疎隔されたという。さらに自傷癖を想起させる文章がある。

壁に向って彼は身を投げた。絶望と涙が彼から流れ出た。彼は恥辱のうちに震え、吐き気に対して身を覆い、怒りのあまり咆哮した。/ 巨大な力が彼の中に目覚めた。彼は闇の中へと退行した...³³

この苦しみの発作はゲオルク・ビュヒナー (Georg Büchner 1813-1837) の短編『レンツ (Lenz)』³⁴ に酷似している。しかし、ウィーンに来て突発した精神と肉体の不均衡の真の理由は語られていない。表面的には上に見てきたように、大都市による疎外に求めることができるが、それはザルツブルクでも、インスブルックでもトラークルに付きまとった感

覚である。トラークルが生涯一所不在の生活を送ったことも周知の事実である。³⁵ ブッシュベックがここで語らないその一つの推測される理由は父の死である。故郷ザルツブルクについては繰り返し描くにもかかわらず、トラークルの家族が言及されていないのは奇異ではないだろうか。いや、もう一つの推測される理由である妹マルガレーテについては『鎮魂歌』の中で簡潔に記されている。

善意をもって彼は優しいあるいは怒りのこもった憂慮の中に妹を取り巻いた。善意を彼は、苦しみと痛みにおいて彼の同情する心を純粹に動かすものすべてに投げ出した。軽薄さから何者かに苦痛をもたらす者には、彼の決して忘れることのない、最も深いところから立ち上がる怒りが向けられた。³⁶

ウィーンが与える憂鬱から、ボルネオのような異国へと逃亡することをトラークルに妨げたものを説明するにあたり、ブッシュベックは「善意 (Güte)」という言葉を用いる。そして、妹マルガレーテとの関係もこの詩人の本質的感情である「善意」に基づいた交流であったとする。トラークルとマルガレーテが近親相姦の関係にあったことは有名だ。その妹は1917年にベルリンでピストル自殺を遂げた。ブッシュベックとトラークルが仲違いした原因も妹の存在であった。ブッシュベックのトラークルと妹について述べる件はそれらをオブラートに包むかのようである。恰もトラークルの自らの作品の中で、抽象化された「妹 (Schwester)」が傷ついた者のもとへ訪れ、慰めるかのように、ここでは「かれ」が妹を訪れる。

『鎮魂歌』の後半はいささかステレオタイプなトラークルの伝記の反復となっている。経済的困窮からあらゆる土地であらゆる仕事に挑戦するがいずれもうまくいかず、精神の安定を失ってゆく詩人。フィッカーによって計画されたヴェネツィアへの慰安旅行を経ても、

彼の詩行の中にはもはや太陽が輝くことはなかった。黄昏が詩行をと
おして幽霊のように出沒する。滅びが人々と景色を闇で包む。³⁷

トラークルの初期の詩には滅びの中にも庇護されるような心地よさが垣
間見える瞬間が記録されていたが、後期の詩はより寡黙で、色調の暗さ
が目立ってくる。この時期トラークルは活動の舞台をインスブルックに
移しており、ブッシュベックとの関係は疎遠になっていたので、おそら
くフィッカーらの証言をもとに再構成された空想の生活が描かれる。

幸福に満ちて彼は四方の壁に囲まれた自らを見た。 / インスブルック、
この街自体が温かく守られており、山々によって覆われている、高く
上方へと。 / そしてハルからミュラウへの村たちは農夫のくるみ込
まれた幸福を歌った。³⁸

後天的にトラークルによって故郷と名指されたインスブルックはトラークル
に一時的な庇護を与えた。³⁹ またフィッカーらの周りに集まっていた
ブレンナー派と呼ばれる芸術家たちの影響からキリスト教を再発見し
てゆくのもこの時期である。

それほど温かく彼は守られているようであった、それほど彼はなだめ
られた、しかしどこかで彼は知っていた、それもまた過ぎ行くこと
を。⁴⁰

杯へとこの地上にやってきた者は誰によってもそこから連れ去られる
ことができない。⁴¹

聖書の表現に依拠したこの言葉とともに、やがて訪れるトラークルの最
期についての記述が始まる。

戦争が夜をこえてやってきた。そして彼を目に見えないうちにそこからふたたび連れ去った、彼が永遠に守られているように思われたところから。⁴²

トラークルは自ら志願して出征し、実際の戦闘に投入される前には、ガリツィアの景色を楽しむ陽気な手紙を書いている。⁴³ところがブッシュベックの手紙にはそうした様子は一切語られない。

ガリツィアの野戦病院。納屋の中に 90 人の重傷者。医師はいない。看護師はいない。薬剤士官補がただ一人。⁴⁴

以下に続くのは、あまりにもよく知られた戦場のトラークルである。この状況下で精神に異常をきたしたため、クラカウの野戦病院に送られてそこで命を絶った。死の数日前にフィッカーが見舞った折の証言、トラークルの従者の手紙、トラークルがフィッカーに宛てた二通の手紙のほかにトラークルの最期を証言するものは残っていない。想像によってブッシュベックは親友の最期を以下のように締めくくる。

彼を人生に留まらせていたものは、責任、謙譲、キリスト教的受苦の感情であった。—彼の目がここで、苦しみ、苦痛に満ちた混乱、ぞっとする崩落のもとにはっきりと見なければならなかったものの過剰の中で、その感情は色褪せ、彼から失われていった。⁴⁵

見られた世界 (die geschaute Welt) が青ざめる日が来た。/ 見る者は自らに死を与えた。/ 幻像 (Die Erscheinung) は形となって留まった。⁴⁶

戦場の悲惨な光景を前にして、彼に「見られた世界」がその色合いを失ったため、「見る者」は死を選択した。しかし、そのヴィジョンは文学として形をとり残った。トラークルがフィッカーに宛てた最後の手紙

の一通は自作詩の校正に関わるものであった。また、死の間際まで刊行予定であった第二詩集について出版社に照会していたことも知られている。すると、ブッシュベックが最後に「見る者」と「見られた者」という言葉でトラークルが織りなした詩世界の勝利を慎ましく述べたのは、死を前にしたトラークルの心理をある程度射当てていると言えるだろう。

3. 結語

ブッシュベックの『鎮魂歌』が書かれた時、トラークルの遺体はまだ異郷であるクラカウの墓地に埋葬されていた。また、詩人の死の二年後に自殺したマルガレーテの墓はベルリンにあった。ブッシュベックはトラークルの文体で、トラークルの語彙を駆使して、しかし常に三人称を用いて客観化に務めることで、この作品を書いた。これはブッシュベックにとっての喪の作業であったと言えるだろう。しかし、妹の件で指摘したように、事実を語り直す志向も窺え、戦場の描写に至ってはフィッカーらの証言を積み重ねただけで、この作品全体の中ではそれほど重要なものと位置付けられていない印象が残る。ブッシュベックにとって重要だったのはおそらく詩人と妹の不幸な関係を文学的に肯定する試みであり、空想された故郷へと二人を埋葬することであつたらう。ただフィッカーらのトラークル理解を全体として誠実に踏襲するものとなっているため、『ブレンナー』同人らによっては肯定的に受けとられたことが推測される。

『鎮魂歌』は謎に包まれたトラークルの生涯に故郷ザルツブルクという一つの視座を与え再構成することに成功した。そしてその際にブッシュベックが選んだ「彼」という三人称を用いて物語化する手法は、その後に広く試みられることとなる「トラークル詩 (Trakl-Gedicht)」あるいは「トラークル小説 (Trakl-Roman)」という詩人を主人公にした文学の先駆けとなった。さらに、伝記的事実や文学作品、手紙などを一定の

視点を保ちつつも、それに縛られすぎることなく羅列する手法は、表現主義者らが用いたモンタージュ手法であり、そこに『鎮魂歌』の文学史的特色を認めることができる。そのため、この作品はトラークルの生涯を記録しただけでなく、1920年代の最後の表現主義文学運動に連なるものでもあると言えるだろう。

本稿は平成30年度成城大学特別研究助成「ゲオルク・トラークル「ザルツブルク版選集」の成立経緯 —ブッシュベックとシュネーディッツを手がかりとして—」の研究成果である。

注

- 1 Georg Trakl: Gedichte. Leipzig 1913.
- 2 Hans Weichselbaum: Georg Trakl. Eine Biographie. Salzburg/Wien 2014, S. 141f. トラークルとブッシュベックの間に交わされた書簡は、1913年11月9日に送られたブッシュベック宛の葉書を最後に確認されていない。ただこれについても、トラークルはウィーンの居酒屋で仲間たちと飲酒した折にふざけて書かれた葉書に署名をしたにすぎない。Georg Trakl: Sämtliche Werke und Briefwechsel. Innsbrucker Ausgabe. Historisch-kritische Ausgabe mit Faksimiles der handschriftlichen Texte Trakls. Hrsg. Eberhard Saueremann und Hermann Zwerschina. Bd. V-2. Briefwechsel. Frankfurt am Main/Basel 2014 [以下、IA-Bd. V-2と略す], S. 514f.
- 3 Der Brenner. Hrsg. Ludwig von Ficker. Innsbruck. 1910-1954.
- 4 1910年に雑誌『メルクーア (Der Merkur)』にトラークルの詩二篇を掲載、1912年に雑誌『叫び (Ruf)』に詩三篇を掲載した。
- 5 その中でも有名なものが、1913年のアルノルト・シェーンベルク (Arnold Schönberg 1874-1951) の演奏会で起こった乱闘騒ぎである。このいわゆるスキャンダルコンサートについて新聞を読んだトラークルのコメントがブッシュベック宛書簡集に残されている。IA-Bd. V-2, S. 370ff.
- 6 小説『ヴォルフ・ディートリヒ (Wolf Dietrich)』(1919) など。
- 7 Erhard Buschbeck: Georg Trakl. Ein Requiem. München 1921.
- 8 Georg Trakl: Aus goldenem Kelch. Die Jugenddichtungen. Salzburg 1939.
- 9 トラークルと戦後ドイツ語抒情詩の関係については以下の拙論を参照。日名淳裕: 戦後ドイツ語抒情詩の出発 「プラーン」とトラークルを手がかりとして [現代詩手帖 (11) 86-89 頁 2017年11月]
- 10 フィッカーの往復書簡集に二人のやりとりが残っている。Ludwig von Ficker:

- Briefwechsel. Bd.1-4. Hrsg. Ignaz Zangerle, Walter Methlagl, Franz Seyr, Anton Unterkircher. Salzburg/Innsbruck. 1986-1966.
- 11 Erhard Buschbeck: Vorwort. In: Trakl. Aus goldenem Kelch, S. 5-8.
 - 12 Buschbeck: Georg Trakl, S. 2.
 - 13 Ebd., S. 5.
 - 14 トラークルは四篇の散文詩を書いた。『悪の変容 (Verwandlung des Bösen)』、『冬の夜 (Winternacht)』、『夢と錯乱 (Traum und Umnachtung)』、『啓示と没落 (Offenbarung und Untergang)』である。
 - 15 Georg Trakl: An den Knaben Elis. In: Ders.: Werke Entwürfe Briefe. Hrsg. Hans-Georg Kemper/Frank Rainer Max. Stuttgart 1984, S. 56f.
 - 16 Buschbeck: a. a. O., S. 5.
 - 17 Georg Trakl: Die schöne Stadt. In: Trakl: a. a. O., S. 14f.
 - 18 Ebd., S. 6.
 - 19 ハイデガーの「詩の中の言語」には以下のような件がある。「トラークルの《奥底における歴史性の欠如 innerster Geschichtslosigkeit》についてよく語られる。この判断における《歴史Geschichte》とは何を指すのか。その名がただ《歴史Historie》つまり、過ぎ去ったもののイメージを指すのであれば、トラークルには歴史性がない。」この言明に顕著なように、トラークルにおける抽象化への傾向は1950年代の作品内在解釈と合致して素朴な時間概念を前提とする「歴史(Historie)」とは一線を画す時を表現したと考えられた。『鎮魂歌』、キリスト教的解釈、ハイデガーの論考のいずれもこの点において共通する。Martin Heidegger: Die Sprache im Gedicht. Eine Erörterung von Georg Trakls Gedicht. In: Unterwegs zur Sprache. Stuttgart 1959, S. 35-82, hier S. 80.
 - 20 Buschbeck: a. a. O., S. 7.
 - 21 Ebd., S. 8.
 - 22 Ebd., S. 9. ソーニャの父親マルメラードフは馬車に身を投げて自殺する。トラークルは「ソーニャ (Sonja)」という題の詩を書いている。Georg Trakl: Sonja. In: Ders.: Werke Entwürfe Briefe, S. 69f.
 - 23 Buschbeck: a. a. O., S. 17f. これはトラークルと同時代にベルリンで活動した詩人ゲオルク・ハイム (Georg Heym 1887-1912) の最期を彷彿とさせる。トラークルとハイムの間には交流があったことは確認されていない。
 - 24 Buschbeck: a. a. O., S. 8.
 - 25 『地獄の季節』あるいはニーチェの『ディオニュソス賛歌』の影響を見ることもできるかもしれない。
 - 26 Vgl. Bernhard Böschstein: Arkadien und Golgatha. In: Interpretationen. Gedichte von Georg Trakl. Stuttgart 1999, S. 80-95.
 - 27 Buschbeck: a. a. O., S. 9.
 - 28 Ebd., S. 11.
 - 29 Georg Trakl: Brief an Maria Geipel (Wien, Ende Oktober 1908) In: Ders.: Werke Entwürfe Briefe, S. 215f.
 - 30 Buschbeck: a. a. O., S. 14.
 - 31 Georg Trakl: Helian. In: Ders.: Werke Entwürfe Briefe, S. 46ff.

- 32 Buschbeck: a. a. O., S. 15.
- 33 Ebd., S.16.
- 34 Georg Büchner: Lenz. In: Ders.: Sämtliche Werke Briefe und Dokumente in zwei Bänden. Hrsg. Henri Poschmann Bd. 1. Dichtungen. Frankfurt/M. 1992, S. 223-250.
- 35 イルゼ・アイヒンガー (Ilse Aichinger 1921-2016) はトラークルを論じるにあたって、彼の三都市間を回遊するかのような落ち着かない生活に注目している。Vgl. Ilse Aichinger: Georg Trakl. In: Christine Ivanovic/Sugi Shindo (Hrsg.): Absprung zur Weiterbesinnung. Geschichte und Medien bei Ilse Aichinger. Tübingen 2011, S. 13-29, hier S. 17.
- 36 Buschbeck: a. a. O., S. 17.
- 37 Ebd., S. 23.
- 38 Ebd., S. 24.
- 39 IA. Bd. V-2, S. 651; S. 699.
- 40 Buschbeck: a. a. O., S. 27.
- 41 Ebd., S. 28.
- 42 Ebd., S. 29.
- 43 Georg Trakl an Ludwig von Ficker (2./ 3. September 1914). In: IA-Bd. V-2, S. 656.
- 44 Buschbeck: a. a. O., S. 29.
- 45 Ebd., S. 30.
- 46 Ebd., S. 31.

